様式第３号

論　文　要　旨

氏　　名	本城　孝浩

論文の要旨

近年子どもの口唇閉鎖や舌の働きに関する様々な報告がされているが、開咬児に着目されたものは少ない。本研究の目的は開咬児の小児期の口唇閉鎖力の特性並びに舌の働きについて検討することである。そこで今回、 九州歯科大学付属病院小児歯科外来を受診した８歳から 11 歳までの正常咬合児 15 名ならびに開咬児 15 名を対象に調査を行った。可撤式矯正装置や固定式矯正装置を使用中、もしくは使用した既往のある者は対象から除外した。口唇圧の測定には多方位口唇閉鎖測定装置を使用した。舌の運動の評価としては、簡易型舌圧測定器による口蓋への舌圧を評価の対象とした。アンケートは坂井の方法に準じて、小児の普段の口唇閉鎖の習慣や呼吸・アレルギーなどに関する８項目について、質問紙によって保護者に記載を依頼した。すべての質問項目に対する回答は選択回答式とした。

その結果、正常咬合児、開咬児の口唇閉鎖運動では上口唇に比べ下口唇が有意に大きく機能していた。開咬児は正常咬合児に比べ有意に鼻下の相対的口唇閉鎖力が小さく、また正常咬合児、開咬児ともに正中線に対して左右対照的な形で、口唇閉鎖力は均衡していた。舌圧の測定からは、正常咬合児、開咬児の両群に有意な差は見られなかった。口蓋への舌挙上の運動についても、正常咬合児と開咬児は類似している事が示唆された。アンケートの結果からは、開咬児は口が開きやすく、鼻で呼吸する傾向があった。